

〔圓珠庵雜記〕松マツ萬葉にもあまた待によせてよめり、然ればちとせをふる物にて、行末をまつ心こころに名付くるか、

〔倭訓栞前編二十九〕まつ松はもつと通ふ、久しきを持つ義也といへり、略中松を貞木といふは

西征賦の貞松によれり、秦皇松に大夫の官を贈りしは史記に出たり、朱文恭の話に、今抗存す、大

さ十圍ばかりと、略中安永二年豊後鶴崎の八幡宮修造す、大木の松枝たれて妨に成をもて、折べ

き談に定れり、其夜右の枝自然によりて常のごとくなれり、其社の地形を筑く時は、五尺計蛇集

りて土を持たり、永祿十一年八月廿四日津國住吉の松樹六十六株、故なくて根より掘抜たり、神

主津守國豊此を奏す、それより十日過て九月三日にウルカンバテレン、鳥羽四塚へ來りぬ、吳書

に松ハ十八公也とも、湖海新聞に木公は松也とも見えたり、

〔古今要覽稿草木〕松○中釋名

麻都 松井古事記東雅云、古語の例によれば、マツとは雪霜をまぢ、其色改ることなきをほめて

訓葉云、松はもつと通ふ、久しきを持つ義なり、此木の葉は餘木と異に、幹にまつはり付も、久しき

なもつといふも、共にいかゞあるべき、信充按に、此木の葉は餘木と異に、幹にまつはり付も、久しき

これ、マツ葉木といふこと、比登都麻都古事記、今も俗言に一本松と云ふものなり、扱此尾

蹟を、殘ちはやふる松藻鹽草、只ひさしき、相おひの松同上、おひあひの松同上、其時生あふ

つままつの木同上、こもたる松同上、子持といふ、そなれ松同上、生かたふきたるなり、またい

松同上、小松同上、姫子松同上、わか松同上、いつ葉のまつ同上、百疊の松同上、門松同上、正月なり、ふ

ありと、山松同上、石根松同上、海松同上、波松同上、加賀にいへると云、共、浦松同上、濱松同上、あ

いと松同上、いづくにも入江にいへしとあり、十かへりの花同上、松同上、たけくまなり、奥儀抄にたけく

いと云々と、たま、つまた玉松也ともいへり、ふたきの松同上、はなはたとて、山のさし出たる所